

モデルの美化の放棄

—— J.-E. リオタールの肖像画と宮廷人のまなざしへの対応

宮崎 匠（東京大学）

ジュネーヴ出身の画家ジャン＝エティエンヌ・リオタールは18世紀ヨーロッパの諸大国の首都において宮廷で絶大な人気を集め、教皇、英仏の王族たち、神聖ローマ皇帝とその一族、その他多くの貴顕の肖像画を制作した。

だがこの肖像画家はモデルの美化にあまりに関心で、そのために大事な顧客の機嫌を損ねることもあった。肖像画制作においてモデルの美化が常套化していた当時であってこれは異例のことだ。このリオタールの肖像表現の特殊性は先行研究によって繰り返し指摘されており、それを同時代の認識論と関係づける考察も行われた。

だが、従来の議論はリオタールの問題意識を出発点に据えているだけで、モデルを美化しない彼の肖像画が宮廷で大いに受容された理由は未だ明らかでない。そこで本発表では、リオタールの肖像画の特殊な表現が18世紀の宮廷人のまなざしによく対応していたことを指摘しつつ、この画家がヨーロッパ各国の宮廷で人気を博した理由の究明を試みる。

そもそも肖像画に関しては、モデルの美化を推奨する伝統が古代から存在した。中でも欠点の描写を避ける手法が紹介・実践され続け、18世紀にも有効な技術と目されていた。しかし、リオタールは肖像画制作の際には常にモデルを粉飾することなく描き、いぼやしわといった好ましくない細部も明確に表現した。

だがそれでもリオタールの肖像画は需要を保ち続けた。それはその作品が、宮廷人の目が親しい人物の肖像画に求めていた内容をよく備えていたためだと考えられる。例えば、リオタールの肖像画が喜ばれたフランスの宮廷では国王から女官までが他人の容姿を辛辣に批評する風潮があったが、そこではモデルを美化しない肖像画は大いに共感を得て受容されただろう。

一方、ウィーンのハプスブルク宮廷では政略結婚の結果、親兄弟が離れて暮らす傾向があり、家族に対する思慕の念が育まれていた。そこでリオタールが描いた皇子らの肖像画に母后マリア・テレジアはかつてない満足を覚えたが、それは潤色を施されずにモデルの個性が重視された肖像画に愛する子供たちの自然な姿を見出したためだろう。彼女はまた一族の肖像画からモデルの健康状態をも読み取っていたが、1770年にリオタールを特に選んでフランスに派遣しマリー・アントワネットの肖像画を描かせたのも、その表現にモデルの近影の偽りのない報告を期したためと推測できる。

リオタールは従来の絵画論の主張や流行の表現に追従せず、その肖像画においてモデルの美化を放棄したことで比類ない独自性を獲得した。結果として画家は近親者の容姿を粉飾せず描いた肖像画を欲する宮廷人の私的な目の要望に応えることができたために、異例の人気を博したと考えられる。かくして、本発表では18世紀ヨーロッパの宮廷を例に、絵画に関する趣味と画家の制作、そして作品受容との間に認められる複雑な関係の一端が提示される。